

にさまり木に止つて居りました。さぜうは井からさび出して井の水は氷になつてました。

よくみるさみづくの鼻の先が何かにひつかけたのか血が出てます。

「先生鼻の所に血が出るよ」早くも見つけてさわぎました。

「昨夜きつこ森の中だと思つて飛び廻つたら、お家がせまいのでさまり木にでもぶつかつたんでせうね。可愛想に、今日は先生が歸る時さばしてやりませうね」「おしいなあ！先生」みんながつまらなそうな顔をしています。

「先生みんな見てしまつたら、飛ばしておやりつて、お父ちゃんも言つたの」えみちやんがこう言つたので、さうく夕方飛ばしてやることにきまりました。その日の夕方に電燈がつく頃、みづくさんをにがしてやりました。

二日も變つたお家に入れられて何だか元氣がない様にしてるだが喜んで裏の山の方へ飛んでいつてしまひました。今頃はきつこお家で楽しく遊んでるでせうね。

## 佳作 子供は風の子

荒井 志 乃

「お姉さん、風の子つて言ふのは、誰の子なの。」

さ聞いたのは、今年八つになる、目のクッキリした、顔のボタボタした健ちやんさいふ子であります。

今、健ちやんから風の子つて言ふのは、誰の子だつて、さ聞かれたのは、健ちやんのお姉さんでした。お姉さんは、

「風の子と言ふのはネ。冬の寒い寒い風が吹いてゐる日でも、外に出て、凧あげしたり、戦争ごっこしたり、球なげをして威勢よく遊ぶ元氣な子を風の子といふんですよ。」

「、健ちゃんに教へました。」

「、健ちゃんには、嬉しさうに體をもじもじしてゐましたが、」

「それぢや、ボクは、風の子ネ、ネエ、お姉さん！ ボクは、お母さんが、御飯だからお歸りつて、お迎へに来て下さるまで、外で遊んでゐませう。」

凧を上げてサ……

お姉さん！ 凧が木にひつかゝつたら、長い竿で取つてネ。」

「、健ちゃんのお話は、凧が木に引つかゝつて、破れて泣きかけた時のことを、思ひ出して、くやしさに話しましたから、」

お姉さんは、

「そつお、そつお、こないだ健ちゃんは、凧を木にさられて困つてゐたネ。健ちゃんが泣くかなと思つて見てゐたけ泣かなかつたネ、えらかつたよ。」

「ほめましたから、ほめられた健ちゃんは、『だつてエ、ボクは風の子だもの、泣くものか……それでもネ、……隆ちゃんも、球なげた時ネ、ボクが投げた球が……お隣の庭に入つて往つたの……』」

其の時。大きな聲で、だれだア……つて言はれた時は、恐かつたよ。」

「、健ちゃんが、少し首をひつこめて、こわさうな顔をして話すのを、きいてゐたお姉さんは、面白がつて、」

「其の球はさうなつたの。」

「、健ちゃんに聞きましたから、」

健ちゃんは、

「隆ちやんご、二人が駈けて逃げてネ、大きな木の陰にかくれてゐたの……さうしたらネ、向ふから、こちらに投げて下さつたの。隆ちやんご、二人で、ソウミ歩いて、球を取りにいづたらネ、……お隣のお姉さんが、二階から笑つて見てゐたヨ。……笑つてゐたけき、こわかつたよ……」

お姉さん、九ちやんはネ。……いつでも炬燵にばかり入つてゐて、外に遊びに出て来ないヨ。ボクが。爪をあげないかつて、お誘ひに往くミネ、耳が冷たいや……

戦争ごつこしないかつて、お誘ひ往くミネ。九ちやんのをばさんが、『いけいけ』ミ言つても、九ちやんは、戦争ごつこよりか、炬燵の方がいゝやつて……だんだん、炬燵の中にもぐつてしまふよ……變だネ、九ちやんなんか、風の子ぢやあないや、炬燵の子だネ……

お姉さん、猫は、炬燵が好きだつたネ……」

ご、又、健ちやんのお話が違つた方に向けられてまゐります。お姉さんは、

「猫は、コタツでまるくなる……『こいふ歌がありますよ。猫は、炬燵が大好きサ。』

其話を聞きますご、健ちやんは

「お姉さん、ぢやあ、九ちやんは炬燵の子ネ、猫ミ仲よしだ。をかしいや……」

ごいひおいて、外に飛んで出ました。出るミすぐ健ちやんは、大きな聲で、

「お姉さん、變なものがネ、裏の屋根の瓦から下がつてゐますヨ、白い棒がサ、早くいらつしやい。ボク、ちよつごさはつて見たら冷めたかつたヨ。お姉さん、早くヨ。」

ご呼ばれたお姉さんは、ニコくしながら、

「變なものが、屋根から下がつてゐるつて、おばけか……蛇か……たご坊主か……それミも兎か熊か……象か……エツミツづか。」

ご、からかはれますご、健ちんは、

「ちがふヨ、そんなものぢやないよ。早く来てね。」

ミ、ぐんぐんお姉さんをお家の裏に引つばつていきました。お姉さんは、

「これかあ……なあんだ。氷柱ぢやないの、昨夜は寒かつたからね、氷柱が出来たんですよ……。健ちやんは、暖かいあちらの國にゐるたから、見たこゝろがないのだね。……これは、水が凍つて出来たのサ。寒いお國にはこゝでも出来ませうヨ。」

「フーン、そんなら、氷おんなじだね……。」

「さうですとも、氷の棒サ。」

「取つてヨウ、ネエ、お姉さん、ボク、九ちやんのお土産にするからサ。」

「健ちやん、およしなさい。あの寒がりやの九ちやんは炬燵の子だから、氷柱なんか持つて往つたら、驚いて逃げるよ。」

ミ申しましたも、

「お姉さん、取つてヨ……。」

「それぢや、一本ね……。」

「ウウン、もつミ……。」

「それなら二本ね……。」

「ウウン、二本……。」

健ちやんからねだられたお姉さんは、

「よつし、二本なの……。ソレ一本、二本、三本……。健ちやん！さうして九ちやんの家まで持つて往くの。」

「繩でしばつて引つ張つて往くの。」

健ちやんが、ゾロゾロ氷柱の束をお隣の九ちやんのお家まで引つ張つて往つて、

「九ちやん、面白いものを持つて來たヨ、君、一緒に賣りに往かない？」

ミ呼びかけますミ、九ちやんは、もぐり込んでゐた炬燵から抜け出して來て、健ちやんの持

つてゐる氷柱を見るなり、

「ウワア、……氷柱か、……寒いやあ。」

ミ、又、炬燵に入りかけましたから、健ちゃんが、

「九ちゃん、氷柱は寒くないヨ。さほるご冷たいだけだよ、ネエ、九ちゃん、氷柱賣りにいかない？面白いよ、ネエ、九ちゃん、氷柱賣りにいかない？」

ミ、面白い面白いさすゝめましたから、寒がりやの九ちゃんも、

「ウン、氷柱賣りに往くよ。待つて、ネ。」

ミ、お部屋に駆けこんで、ぶくぶくした厚い襟巻をして出て来ました。その九ちゃんを見た健ちゃんは、

「九ちゃん、よせよ、氷柱賣りが、厚い襟巻なんかするミ笑はれるよ。子供は風の子サ。」

ミ笑ひましたので、笑はれた九ちゃんは、その厚い襟巻をいきなりなげ捨て、健ちゃんの持つてゐる氷柱の繩を持ちました。

健ちゃんは、長い棒を、氷柱をしばつてある繩に通して、片方を擔ぎ上げましたから、九ちゃんも片方を擔ぎ上げました。それから二人して、町の中を、

氷柱や氷柱、

氷柱や氷柱、

ミ、賣り廻つて、しまひに幼稚園の先生のお家にまゐりました。

「先生、氷柱を買つて頂戴。」

ミ、威勢よく大きな聲で呼びました。

先生は、出ていらつしやいました。そして、健ちゃんミ、九ちゃんミが、氷柱を擔いで來てゐるのを見て、びつくりなさいましたが、あの寒がりやの九ちゃんが、襟巻もしないで、氷柱を擔いでゐるのを見て、

「オヤ、オヤ、九ちゃんの元氣な事は……」

「ほめられますよ、九ちゃんは、」

「先生、子供は風の子ですつて、健ちゃんと言つたから僕も風の子になつたんです。……先生、水柱買ってね……」

「、幼稚園の先生にお願ひいたしますよ、」

「ハイ、ハイ、買ひませうよ、幾らですか……赤いお金上げませうか、白いお金上げませうか……」

「聞かれました。二人は、」

「先生、赤いのを頂戴ね。……」

「ご返事しましたから、先生は、笑ひながら、赤いお金二つを渡して下さいました。」

「健ちゃんも、九ちゃんも、赤いお金一つ宛いたゞいて喜びました。それから、先生が、」

「此の水柱をござうませうネエ。……」

「ご申されますよ、健ちゃんが、」

「先生、おみおつけにするよ、おいしいでせう。」

「ご申しましたが、九ちゃんは、」

「先生、水柱はかたいからお漬物にするよいゝでせう。」

「ご申しました。先生はカラ／＼笑ひながら、」

「まあ、あなた方は、お商賣がお上手ね……。水柱のおみおつけ……水柱のお漬物……おいしいでせうね。」

「ごおつしつて、又カラ／＼ごお笑ひになりましたから、健ちゃんも九ちゃんも笑ひました。」

それから、道々、相談をして、水柱を賣つて戴いたお金を兵隊さんに獻金させようきめて、町のお宮の前まで来た時、兵隊さんが、向ふからいらつしやいました。二人は、いきなり

駈けていつて、

「兵隊さん、……このお金はネ、僕たちが氷柱を賣つたお金ですから、獻金いたします。」

ミ、さし出しました。兵隊さんは、何だか分らなかつたが、手を出して受け取りました。兵隊さんに、お金を渡した健ちゃんミ九ちゃんミは、急いで駈けて、あつちへ逃げました。

兵隊さんは、駈けていく二人の子供達を見送つて、

「此の寒いのに、足袋もはかないで、襟巻もしないで、氷柱賣りをしたさいつたが、元氣だな。子供は風の子だ。……おツ……此のお金は、お宮におさいせんに上げて来よう。」

ミ言ひながらお宮にまるつて、拍手をボンボンミ拍つて、ていねいに拜みました。さうするミ、向ふの方から、

僕らは風の子、日本男兒

ツラ、ツラ、

ツラ、ツラ、

ツラ、を 擔いで

さつくわんだ。

イエー—— イエー—— ウオー——

ミ、威勢のいゝ子供の歌がきこゑて來ました。それを聞くミ、兵隊さんは、背のびをして、

「おおーい。大きくなつたらネ、強い兵隊さんになつて頂戴ヨ、ネエ……風の子の諸君……」

ミ、大きな聲で呼んで、帽子を幾度も幾度も振つて下さいましたミサ。ハイ。

オハリ